

# 水産資源の調査・研究

## はじめに

水産資源の調査・研究は、“海の魚の漁獲がどうして年々変動するのかという疑問からはじまった、水産資源の自然変動の問題である。また、人間の漁獲が資源にどのように影響するかということが乱獲や適正漁獲量の問題として取り上げられてきた。”(『水産資源学』東京大学出版会)

水産試験場に赴任して4年が経過しようとしている。遅いかかもしれないが、試験・研究において、やっと自分の仕事が見えてきた。着任以来、国庫委託事業『資源評価調査』(県：200カイリ水域内漁業資源調査)を担当し、主にアジ・サバ・イワシ類の資源動向に関わる調査・研究を行っている。

## 資源評価調査

みなさんは、“資源評価結果報告書”(以前は、「資源評価票」と呼んでいた。)を見たことがありますか? 『資源評価調査』では、全国で42魚種81評価群において、資源構造(系群、分布回遊等)・資源状態(水準、動向)・資源管理方策(目標及び手段、動向予測等)等について水産庁水産研究所がとりまとめています。これらは、TAC管理のための科学的根拠となる他、資源の持続的利用等に必要不可欠なものとなります。水産研究所は、それぞれが担当する海域の評価対象魚種について、独自のデータと各県が調査したデータに基づき、“コホート解析”や“卵数法”といった手法を用いて資源量推定や管理方策の検討を行っています。我々各県水試は、漁獲量調査や体長測定、精密測定(体長、体重、生殖腺重量等を測定)の実施や調査船を使用した卵稚仔調査を行い、その結果を水産研究所へ報告します。資源評価結果は、漁業

者等への情報提供を行う他、漁況予報にも活用しています。平成12年度からは沿岸資源動向調査(対象魚種：イサキ・トビウオ類・キビナゴ・バショウカジキ・ソデイカ)も加わり、資源調査の重要性が増しています。

## シンポジウム出席

先日、東大海洋研共同利用シンポジウム『ニシン科魚類の繁殖生態と資源変動』に参加しました。同じニシン科でも、主に北の海域に生息するニシンやマイワシと南の海域に生息するキビナゴやウルメイワシでは、資源変動の幅が大きく異なります。繁殖生態との関わりからそのメカニズムにアプローチしたもので、ニシン科魚類の生活史特性の比較や適応戦略等興味深いものでした。

## まとめ

このように水産資源の調査・研究は、漁獲量や水揚げされた魚から得られるデータにより資源量の推定や漁業実態等から資源管理方策を検討するものと魚の側に立って、分布・回遊の把握や繁殖生態等から資源について研究するものがあります。

平成13年度から水産基本政策大綱に基づき『資源回復計画』( )が実施されると、これまで以上に水産資源の調査・研究の重要性が増すことが予想されます。

『資源回復計画』：現在、我が国周辺水域においては、資源状態が著しく悪化していることから、緊急に資源の回復を図ることが必要な魚種について、全国又は海域レベルで、資源回復のための計画を定め、減船・休漁等を含む漁獲努力量の削減、資源の積極的培養、漁場環境の保全等の資源回復措置を、期間を定めて講じることにより、資源の早急な回復を図る制度である。(漁業部 板坂)

